

# 六花

7

俳句雑誌りつか  
2012 (平成24年)  
Cover Dress of Little Bird



# 山田六甲

親亀の目に手をかける子亀かな  
世の外に声をだしけり牛蛙  
夏蝶の枝垂の中を抜け出せず  
自から張裂けてゐし梅雨きのこ  
梅雨晴れや一枚岩の半乾き  
下闇に髭を光らす猫名主  
梅雨晴の猫と見合ひをしてをりぬ  
萍に背中まるめて句を待てる  
萍や時計回りに池の水

梅雨晴の傘さしながら歩きけり  
萍に頭出したるみどり亀  
萍をかるがる歩く虫浄土  
噴水の音熊笹の向うより  
大木に噴水の音跳返る  
大楠の根を酢漿草かたばみの競ひ咲く  
梅雨晴や手吹きガラスの売残り  
ギヤマンと切子硝子に値札なし  
日傘して印度香炉を並べけり

かき氷搔きこぼしては盛りにつけり  
緑蔭にをみな座りをしたる犬  
翼には鞠の掛の夏落葉  
びつしりと高麗芝の梅雨晴間  
池に浮くザリガニ捕りの糸と竿  
睡蓮の照返しくる傘の中  
本丸へ姫苗宿の咲きそろふ  
白日の実をこぼしゐる実梅かな  
玉柘植を覆ひてゐたる蜘蛛の絹

萍に寄り切られたる汀かな  
梅雨晴や雲の境の定まらず  
青柳の雨は黒髪梳きぬたる  
春雨を衣に岩の静かなり  
巢の鳥に二日続きの雨激し  
雨脚の見えてをりけり亀の首  
五月雨の猫に渡してありし板  
春落葉耳を澄まさばめくれけり

大山

大山だいせんに登らば晴れてくれにけり

八重垣神社

わき水に占ふこともなくなりぬ

五月雨に出雲八重垣籠らるる

五月雨の絵馬の裏まで濡れてゐし

供養にと呷りぬ冷し天狗舞

赤腹の袖振りながらのぼりくる

水面にて腹を見せくれたる蝶蜩

# 春の供花水くみにゆく母の川

梶浦玲良子

はるのくげみずくみにゆくははのかわ かじうられいりようし

銀嶺の果てなく走る春の空

春の星降る藤織りの機の音

ふたり行くひとつは影か遍路道

年輪の渦に落ちたる春の蝉

供花は彼岸詣での手向花のことだろう。墓の水を替えるために、すぐそばを流れる川で汲んだ。母の川とは母なる川と言う意味を含んだ川か、母との思い出が一杯つまった川か、この地域のあらゆるものを育む母なる川。春水がゆたかに流れている原風景の川。彼岸や盆に供花の水替えや墓を洗う光景は沢山出てくるが、このような水の替え方もあるのだ。「母の川」へ水汲みにゆくと言っただけなのだが、さまざまな連想を広げて読者の心を潤わせてくれる。

# 花誘ふ音になりたるこぬか雨

松本文一郎

はなざさそうおどになりたるこぬかあめ まつもとぶんいちろう

愛犬の綱のゆるまず青き踏む

よろこびにあふるる堰や猫柳

うららかや雀の遊ぶ屏の檻

うららかや檻のコンドル動かざり

桜のつぼみが膨らんで、間もなく開花する時期になってきた。その蕾に小糠雨がそぼ降り、やがて本格的な雨が降ってきた。その雨の強さが桜の開花を促している音になったというのだ。開花を促す刺激を与える雨粒を「花誘ふ音」と雨音を表現するのがいい。花を養う天気を「養花天」之いつて近年季語として定着しようとしている。「養花天」は中国の言葉らしく春、いろいろな花が咲く頃急に冷え込んだり曇ったり熱くなったりする天気をいうが、俳句では桜。養花雨という言葉もあるが「誘花雨」や「誘花天」などとして句を詠んで季語に定着すればいい。

# 放たれて光を掴む桜かな

## 五ヶ瀬川流一

はなたれてひかりをつかむさくらかな　ごかせがわりゆういち

出迎への媼の背丈芝桜

日帰りといへども嬉し花の旅

雨上がる枝垂れ桜と旅の空

ぜんまいを摘み日帰りの旅を行く

桜が散ることを「放たれて」と観た感覚がいい。今こそ桜の花びらは幹から、枝から放たれて自由の風に乗った。その風に散りながらきらきら輝く桜の花びらが「光を掴む」と言ったのがいい。自由の風を掴んだ桜はさらに光を掴んでさらに飛躍してゆく。文字通り飛び、躍って天を駆けめぐるのである。果ては魂のごとく宇宙に遍満して行くのである。久しぶりに大きな俳句に出会った。流一さんの俳号、「五ヶ瀬川」とは宮崎県に流れる川の名。一昨年の一昨年から五ヶ瀬川流一沿いに天の岩戸神社まで行ったが、桜の時期ならこの句のような光景に違いない。

雪 卿 集

春の蟬

梶浦玲良子

年輪の渦に落ちたる春の蟬  
春の星降る藤織りの機の音  
ふたり行くひとつは影か遍路道  
春の供花水汲みにゆく母の川  
銀嶺の果てなく走る春の空

日 永

志方章子

船笛に驚かさるる霞かな  
皆勤賞もらひ次男の進級す  
空想の旅に出てゐる日永かな  
嘘泣きを覚えたる子よ山笑ふ  
患者の絵飾る回廊あたたかし

せつ じゅ しゅう  
雪 樹 集

妖 怪 出口 誠

幾度もしぶきを上ぐる雪解川  
雪残る峰に迫りてドーム建つ  
妖怪を呼び込み赤し春の月  
里桜開きしままに落ちてをり  
里桜触れて幼なの肌思ふ

暮 春 藤生不二男

をさめたる一言のあり春の雷  
菜の花に入り菜の花を出でにけり  
芽柳のしだるる枝の揃ひけり  
つばくろの飛び交ふ空となりにけり  
足許に鳩の来てゐる暮春かな

# 蛭雪譚 六甲

七月号選後に

年輪の渦に落ちたる春の蟬

梶浦玲良子

春の蟬が切り株に落ちた。そのことを年輪の「渦」と言った。それを読者が作者の代わりに水の渦と見立てる仕組み。春蟬が渦に落ちたことよって渦の中でぐるぐる回ったり、年輪が波紋のように感じられるのである。読者に錯覚を起こさせるエネルギーを持つているといえる。もしここで、「波紋」などと言ったら言い遂せてしまい、読者の鑑賞の域まで制約してしまう。俳句はかく言いとどまることによって力を持つのである。

春の供花水くみにゆく母の川

供花は彼岸参りの手向花のことだろう。供花の水を替えるのに、墓のすぐそばを流れる川で汲んだ。母の川とは母との思い出が一杯つまった川か、この地域のあらゆるものを育む母なる川。川には春水がゆたかに流れている。よき光景である。彼岸や盆に供花の水替えや墓を洗う光景は沢山出てくるが、このような水の替え方もあるのだ。「母の川」へ水汲みにゆくと言っただけなのだが、さまざまな連想を広げてくれる。夢風撰。(以下略)

# 六花集

藥 桜 山 つ 束  
桜 藥 路 れ の  
と 赤 行 な の  
な き く く 日  
り 矢 右 も 々  
落 と 右 も を  
着 な 左 ひ 惜  
け り 左 ひ し  
る 地 も 断 み  
昨 地 春 り て  
日 を 春 桜 散  
今 埋 の 春 散  
日 め 色 愁 る

ほ 月 風 駆 今  
う 見 鈴 け 一  
ほ 草 の 出 度  
う 海 鈍 と 空  
と 風 く 雷 に  
螢 の に 鏑 雨 舞  
明 揺 た 肩 ひ  
か れ る を 飛  
り 故き音 た べ  
闇 郷となき 揚  
に の り け 羽  
熔 け 夏 ぬ り 蝶

春 一 同 桜 正  
愁 人 期 並 装  
の 家<sup>ゃ</sup> 会 木 の  
眼 へ 果 尽 母  
鏡 歸 て き を  
を 替 ほ 散 所 従  
へ な かり に へ  
ぬ く ぢ 母 入  
口 春 り 校 学  
紅 の 夕 あ  
も 暮 桜 り す

小  
寺  
ふ  
く  
子

加  
納  
  
淳  
子

平  
居  
  
滯  
子